

零歳児クラスの指導計画について —クラス全体の月案の必要性—

齋藤 信

はじめに

零歳児は月齢による発達の差が大きく、月齢が同じであっても個人差が大きい。そのため、多くの乳児保育のテキストや保育者向けの雑誌に書かれている指導計画において零歳児は一人ひとりの子どもについて個別に立てることが必要と言われ、個別の指導計画の立て方が紹介されている（千羽 1990, 256-58）。筆者も零歳児クラスの子ども達一人ひとりについての個別の計画は必要であると考えた。

しかし、個別の計画があるからといって零歳児クラスのクラス全体の指導計画が無くて良いとは考えない。以下にその理由をあげ、筆者がかつて勤めていた東京都の A 保育園における零歳児クラス全体の指導計画について、本論では月案を取り上げてそれを書く意義を述べていく。

1. 零歳児保育の特徴と課題

1-1. 「緩やかな担当制」による保育

林によると「零歳児クラスの保育を行う上で『緩やかな担当制』で行っている保育園が 90.9%であった」。そして、記述された内容として、「食事では対応人数は守られているが、ゆったりと一人ひとりへの対応ということが難しい。排泄では担任保育士が常に担任の子どもの対応ができるわけではない。その時々に応じてその場にいる保育士が対応している」。ほとんどの保育園において緩やかな担当制で保育が行われており、保育士間で子どもの実態や保育について共通理解していることが必要になる。さらに、零歳児クラス全体として「個人差があるため一人ひとりに対応したがやはり全体の流れに合わせていこうとする」（林 2007, 78, 80）という例もあげられていた。個別の対応を十分に行う必要があるが、やむを得ず全体の流れに合わせなくてはならない、ということはクラス全体の流れそのものについて零歳児クラスの保育士がよく検討する必要があると考えられる。

1-2. 零歳児クラスの環境構成

村上は零歳児クラス保育室の環境構成について調べている。「保育室の空間構成を変更して以降、実際に子ども達の遊び時間が増えていることがわかる」。「空間構成の変更前に比べて、1回あたりの遊び時間が長くなっている」。「このように K 保育園の零歳児クラスでは、自由遊びの時間において保育室の空間構成を変えていくなかで、子ども達の遊びの質が次第に変わってきている。子ども達が部屋中をフラフラ歩き回ったりきょろきょろ周りを見回したりする機会が減り、子どもが実際に遊ぶ割合が高くなってきている。また単に遊び時間の問題だけでなく、子どもは落ち着き集中しじっくり遊ぶようになってきている」。そして、「『子どもが主体的に遊ぶようになった』という声と同時に、『子どもを見守ること

が多くなってきた』と保育も変わっていった」(村上 2009, 26, 28)。保育士が傍にいても保育士を頼って遊んでもらうのではなく、保育士は子どもの遊びを見守ることができるようになるほど、子ども達が集中して遊ぶことができるようになったということは、ここで行われた環境構成は子ども達が自分達で遊ぶという力を引き出すことにつながったのだといえる。零歳児クラスの保育室環境をどのようなものにするかは、零歳児クラス全体にかかわることであるからその環境設定に関してはクラス全体に関して考えていかななくてはならない。環境構成からも零歳児クラス全体の指導計画の必要性が考えられる。

1-3. 子ども同士のかかわり

秋葉らは、「零歳前半の子どもも、友達が泣き出すと泣き出したり、声を上げて喜んでいる友達をジーと見つめたりする。一歳前後になると友達の持っているおもちゃを取りに行ったりする姿が多く見られ、友達とのかかわりが大きく変化することがわかる。このように、友達が側にいることによって影響し合いより活発に行動するようになる。これらの行動に保育者は着眼し、より教育的な働きかけによって、友達との関係を豊かに育んでいきたい」(秋葉 1999, 163)と言っている。月齢ごとの緩やかな担当制で保育を行っていても、月齢のまとまったグループの子どもだけで遊ぶばかりではなく、クラス全体で遊ぶ時間を設けることによって月齢の低い子ども達に良い刺激を与えることになり、月齢の高い子どもにとってもかかわる相手を広げることができる。

そして、自分からかかわることができるようになった月齢の高い子どもは、同じ零歳児クラスにいる子ども達全員に対して働きかけかかわっていく。このようなかかわりがあることが保育園で零歳児を集団で保育することのメリットと言える。そのためには、クラス全体で遊ぶ時間をどのように確保するか、そしてその時間にどのような遊びをして、各保育士はどのような役割を果たすか、十分に検討しておくことが必要である。

1-4. 零歳児の遊びにおける保育士の役割

また、秋葉らは「零歳児は自分から直接友達にかかわっていくことは難しい。そのため保育者の役割はたいへん大きい。大好きな大人、おもちゃを仲立ちとして、共感し合い、『友達と一緒にいることが楽しい』『一緒に遊ぶことが楽しい』という気持ちをどれだけ育てるのが重要である」と述べている。

保育士はその場にいる子どもと子どもを結び付けて、自分以外にも子どもがいることから一緒に遊ぶ楽しさを少しずつ分らせていく。そのためには、クラス全体でその時間にどのような遊びを行うか、どのような遊具を用意するか、ということ話しあっておくことが必要になる。

さらに、「生活習慣についても、友達の模倣をしたり、共感し合ったりすることを通じて、家では難しいことが保育所の友達がいる中ではできていくことが多くある」(秋葉他 1999, 164)と述べている。生活習慣の場面でも月齢の高い子どもの姿を見ることが月齢の低い子どもにとってとても良い刺激になっていると考えられる。意識的に月齢の高い子どもの姿を見せていくことが求められ、このような点でもクラス全体として考えていくことが大切なのである。

1-5. 零歳児クラス担任の話し合いの重要性

さらに、秋葉らは「どのように育ててほしいのか、保育士同士が話し合い基本の方針を考えていくことが大切」(秋葉他 1999, 164) と言っている。自分の担当の子どもではなくても各保育士が観察することができたそれぞれの子どものいろいろな側面を提出し合うことによって、その子どもについてよりの確な実態を把握することが可能になる。そのためには自分の担当の子ども達だけではなく、クラス全体の子ども達を常に観察していこうとする姿勢が大切であり、それができるためには担当の子どもだけではなくクラス全体の子ども達が「今どのようなことをしているのか」ということを意識していることが必要である。

さらに、保育においては「どの子どもにも同じ対応をしていくのではなく、家庭環境や両親に着目して保育の手立てを引き出していく。保育していく中で変化していく子どもの姿を保育者間で、また、家庭ともじっくり話し合い生活を変えていかれるように保育を進めている。この子どもと大人の信頼関係が子どもの主体的活動を引き出していく力につながり、やがては自分から人を求めていく力も育っていく」のである(秋葉他 1999, 161)。それぞれの子どもの現在の姿について保育者間でよく話し合い、家庭にはどのようなことを要望していけばよいのか子ども達の具体的な課題について細かく検討していくことが、必要なのである。

2. 零歳児クラス全体の月案の必要性

2-1. 複数担任制

秋葉らは「保育者のチームワークがうまくいかないと、子ども達は楽しい生活が送れない。常に子どものありのままの姿や子どもへの思いを語り合い、そこから目ざす方向を一致させていく必要がある。職種が違う職員相互もお互いに尊重しながらそれぞれの専門性を活かして子ども達にかかわっていくことが大切」と言っている(秋葉他 1999, 165)。

一人の子どもを育てる時に、いろいろな人の目でその子どもを観察し、またいろいろな場面における一人の子どもの姿を観察することによって、その子どもについて多くの情報を得ることができる。そして、その子どもについて多用な見方をすることができ、発達のいろいろな特徴をつかんでいくことができるようになる。

また、零歳児の二回寝と一回寝の子どもでは確かにその一日の生活リズムがほとんど逆転してしまう。しかし、それでも二回寝の子どもが午前の睡眠に入る前や午後の睡眠から起きた後などは零歳児クラス全体で活動を行うことができる。そのため、担当するそれぞれの子どもが寝ている間は、寝ている様子を見ていくことは必要だが、起きている担当以外の子ども達の保育を行うことが求められる。

今クラス全員の子どものがどのような状態にあり、担当保育士としてはどのような点が気になっていて、何に気をつけて保育していけばよいのか、という大切な課題は、零歳児クラスの保育士が共通に理解していることが必要なことなのである。そのためには零歳児クラス全体の計画をクラス全員の保育士が共通課題として意識していられるように立てることが重要なのである。

2-2. 零歳児の特徴から

零歳児は発達が著しく、零歳児にとって一日の価値はとても大きいといえる。そのため、細かいところまで観察していき、発達相応の対応をして次の発達を引き出していくことが必要である。そのためには毎日の報告と話し合いが十分に行われ細かいところまで考えていくことが大切なのである。

そのためには、発達が著しい子ども達なので、育ってきた力を伸ばしていくようなかかわりが特に重要である。いつまでも従前通りのかかわりではいけないわけである。そして、このような「今、その子に育ちつつあること」を担当以外の零歳児クラス保育士にも伝えてかかわり方を変えていってもらわなくてはならない。

また子どもの発達はいろいろな面で、たとえ同じ月齢の子どもであっても早かったり遅かったりする。そのため、例えば一番高月齢の子どもであっても食事の進みが遅い場合などは離乳食の段階を戻したり、月齢の違うグループに入れる等自分から食べやすくしていく、という配慮が必要なことがある。そのようにその子どもによっていろいろな早さで進んでいく。その子どもに適切な保育を行っていくためには、活動によってその子どもの今の状態に最も適切なグループに入れて行うことが望ましいのである。そのように柔軟に担当やグループを考えていくためには、零歳児クラスの保育士が一人ひとりの子どもについて、現在の細かい状態まで共通に理解し、個々の子どもにとって今何を大切にすることが良いのかわかっていることが必要である。そのためには、毎日の話し合いを行う基準として、その月の保育に対する零歳児クラス全体の指導計画が必要なのである。

2-3. 個別の保育を考えるために

零歳児クラスでは個別の指導計画を書かねばならない。週案を丁寧に書ければ望ましいが個別の日誌も書かなくてはならない保育士に過重な負担になりかねない。そこで零歳児クラス全体の月案をクラス全体で話し合っただけで考え、それを受けて担当する一人一人の子どもについての月案をクラス全体の月案と同じ項目で考えていくことが望ましいと考える。

零歳児は発達が著しいので月単位ならば一人の子どもにおいて何らかの側面において発達していることが考えられる。また、逆に先月からなんらの変化も認められなければ、それも自分達の保育に何らかの不備があったり、子どもに障がい等があることも考えられるので、それを確認していくためにも月単位で零歳児クラス全体の保育について考えていくことは必要なのである。

2-4. クラス日誌の記述との関連

さらに、緩やかな担当をもって保育をしているのだから、その担当した子どもについては担当保育士がその日の姿について記録していく。しかし、その日に行った保育や気になった姿などについて報告した事実とそれについて話し合ったことやこれからの課題などをクラス全体の保育記録・日誌として残していかななくてはならない。クラス全体の記録・日誌なので、その日に話し合ったことを話し合うもとになった子どもの事例も含めて書き留めておくことによって、それを書く保育士にクラス全体を考える意識を高めると同時に、これまでどのような保育を行ってきたのか、他の保育士が資料として使うことができるものを書かなくてはならない。そのためには先月末から子ども達がどのように発達してきた

か、先月の子どもや保育士の課題をどのように改善してきたのか、という視点が必要であり、それを考えることによって零歳児クラス全体の保育をより適切な方向に進めていくことができるのである。そのような日誌を書くことができるためにも零歳児クラス全体の月案が必要なのである。

2-5. 一歳児クラスを見通して

年度末になると通常ほとんどの子どもが一回寝の生活リズムで過ごせるようになってくる。そして、1歳児クラスでの保育を想定してクラス全体で活動することが多くなる。そうなれば零歳児クラス全体の指導計画の重要性が増してくる。また、一歳児クラスになれば子どもの数に対して担任保育士の数は減る。そのため、月齢の低い子どもでも零歳児クラスに在る間に一回寝の生活リズムになり離乳食も終えて一歳児クラスの食事が出来るようになっていく必要がある。家庭との連携が重要になり、無理強いや難しいが、保育条件が限られてくるので、子ども達の発達を引き出していくことが迫られる。そのような保育をしていくためにも、担当保育士だけではなく零歳児担当の保育士全員で月齢の低い子どもを育てていくことが必要になるのである。年度末を迎える零歳児クラスの課題はこのように自ずから明らかになり、基本的保育方針として意識していくことが必要となる。

3. 零歳児クラス全体の指導計画の例から

上に述べた零歳児クラス全体の指導計画の必要性を踏まえた月案を、筆者が勤めていたA保育園では毎月書いていた。以下に、2011年5月の月案前半をあげて上記のような零歳児クラス全体の月案の特徴がどのように表れているのか検討していく。

A 保育園 零歳児クラス（もも組）2011年5月指導計画

目 標	・ 保育園の生活に慣れ泣かずに過ごすことができる。 ・ 食事、睡眠など子どものリズムに合わせる。 ・ いろいろな遊具で遊べる（保育士にべったりではなく、声をかけられたり少しのかかわりにより） ・ 戸外での生活（園庭、園外への散歩）を楽しむ。	留 意 点	4月に引き続き園でも生活に慣れることを大事にし睡眠、食事、遊びなどの時間を個々に合わせつつ、月齢相応の生活リズムに近づけていく。 保育室だけではなく、園内外の散歩で視野を広くしていく。園での生活がまだ不安定な子どもの親	行 事	避難訓練 10日 誕生会 12日 身体測定 12日 乳児健診 13, 27日	在 籍 数	男 7名 女 5名 計 12名 （零歳児クラス担任保育士4名、保健師1名）	今 後 の 課 題	子ども達や保護者の様子やかかわり方などつかめてきたので1日の生活プログラムを固定し、12人の生活がスムーズに流れるように整備していく。同時に遊び・運動を中心にも
--------	---	-------------	--	--------	--	-------------	--	-----------------------	--

			と連絡を取り原因や対応の仕方などを早くつかむようにする。					も組（零歳児クラス）保育室にとどまらず子どもの世界を広げ刺激を増やすような計画を組む。
	望ましい姿とねらい	望ましい経験と配慮		保育経過と今後の課題				
全 体	大人から離れてしばらくの間は一人遊びができる。 食事をしっかりと摂りたっぷり睡眠をとる。	それぞれの好きな遊具を準備し、大人べったりではなく遊具へ気持ちを向け誘う。時間差のある睡眠を保障していく。		食事、睡眠、遊びなどで月齢相応の姿が出始め、活気のあるクラスになっている。				
食 事	自分から食事をしようという気持ちになる、噛む、飲み込む。 後期食：K,H,S,N,SH：手づかみ、スプーン、フォークを使って自分で食べようとする、コップを持って飲もうとする。 中期食：M,Y,NO,KO：口を大きく開ける、よく噛む。 初期食：NA,R スプーンに慣れ飲むことを覚える。 準備食：RY ミルクをたっぷり飲む。	月齢と食事の形態が子どもによってとても違う。噛み方、意欲など育ちきれていない子どもが多いので引き続き注意する。 1対1での食事を心がけ、無理強いはしないが一口は食べるように促す（家庭との連絡を密にとる）。		手づかみやカップを持つことはかなり定着しつつある。野菜や肉など苦手な物は口から出したり横を向いて嫌がる場合もあるが繰り返して一口は食べられるように促した。M,Y,Nは全体的に意欲が弱い。NAはミルクの方を好むが食べさせれば進む。Rもスプーンを出すと、口を大きく開く。Yは一対一で食べさせれば食べる。一日母親が離乳食を食べさせに来た。				
睡 眠	一人ひとりの必要に応じて睡眠を十分にとる。 一回寝のリズムがとれるようになってきているか様子を見つつ午前1回（1h~1.5h）、午後1回（1h~1.5h）の午睡にする。	食事中に眠くなる状態が続く子どもは多少寝る時にぐずっても何とか寝かせて、その後食事にする。時間差を活用して低月齢のこの保育室外での遊びを保障していく。寝る時の向き、癖、寝かせ方を伝達し合う。		高月齢の子どもも食事中に眠くなってしまうので全員1回寝をさせてから食事にする。 ベッドに入れ背中を叩いただけでは寝られない子が多く大泣きの後入眠する子（K,H,Y）30分位ですぐに目が覚めてしまう子（M,Y）は様子を見ていく。抱かせて眠る子への家庭指導をする。				
排	オムツが汚れたら泣いた	お尻のただれやすいNやYは必ず清		Yは排便時ではなくても清拭を繰り返				

泄	り動作で知らせる。オムツを替えてもらう時嫌がらずにいる。	拭をする。まめにオムツを替え、いつも気持ちよく過ごさせる。足に触ったり声をかけオムツを替える時を楽しいかかわりの時間にする。	返し薬を塗った。食後の排便が定着しつつある。
健康・清潔	外気浴、日光浴をする。身体を拭いたり、着替えを嫌がらずにする。	座位が安定すればワゴン、それまではおぶって散歩に出る。花、草、犬を見せたり、理事長宅の芝生で遊ぶ。	ワゴンで園外や園内へ出る。テラスや屋上などへ出る。戸外が好きで表情も良くなり気持ちが良さそうにしている。

高月齢児：K,H,S,N,SH 中月齢児：M,Y,NO,KO 低月齢児：NA,R,RY

上の月案は1枚目であり、「運動、遊び、対人関係、言語、家庭連絡」という項目で2枚目を書いている。これらの項目は、個人別の計画と同じものであり、保育士はこのクラス全体の計画をもとに担当する子どもたち一人ひとりについて同じ各項目についてその月の計画を立てる。

書かれている内容を見れば、零歳児クラス全体として共通していることがまずあげられ、さらにこの月に特に留意していくことがあげられていることがわかる。そして、零歳児クラス担任の保育士や看護師、離乳食担当の栄養士などと一緒に話し合って作成するこのクラス全体の月案を基にして、零歳児クラスの保育士は担当する子どもの個別の月案を考えていくのである。

「目標」として「保育園の生活に慣れ泣かずに過ごすことができる」ことは、クラス全体に共通しており入園してまだ1か月であり連休明けということからあげられている。

「食事・睡眠など子どものリズムに合わせる」として、子どもの生理的リズムに合わせることが基本としているわけだが、「留意点」では「月齢相応のリズムに近づけていく」として「生理的リズム」から発達相応の「保育園の生活リズム」に合わせられるように工夫していき、保護者とも連携をとっていくことを目指している。入園当初はその子どもの生理的リズムを尊重するが、月齢相応の発達を引きだし保育園での生活によってさらに発達させていくためには月齢相応の生活リズムに整えていくことが重要なのである。子どもの発達を考えるためにも、クラス全体としての生活・保育をどのように行うのかを検討していくためにも基本的に重要なことなのである。

子ども達の遊びについても、保育士が常に傍にいて遊んであげるのではなく、子どもが自分で遊べるようになることを目指している。保育士の特性として子どもの要求に応えることを通常大切にしているので、子どもの求めに応じて一緒に遊び続けてしまう、ということが十分に考えられる。そのような保育士一般の特性があることを踏まえて、零歳児クラスの保育士全員が意識して子どもが一人で遊べるように配慮していかななくてはならないことなので、このようにあげられているのである。

「時間差を活用して低月齢の子どもの保育室外での遊びを保障」するため、担当にかかわらず一回寝の子ども達が寝ている間に零歳児クラス保育士全員で協力することが必要であることを確認している。低月齢の子どもは起きている時に意図的にいろいろな体験をさせていくことが重要である。ところが、低月齢の子どもは保育士が抱いてあげなくてはな

らない。十分な対応をするためには、一人の保育士が一人の子どもを抱いていくことが必要になる。その間、少なくとも二人の子どもの保育はその子ども達の担当ではない保育士が行わなくてはならない。このように、個々の子どもに十分な体験や遊びをさせようとすると少なくとも零歳児クラスの保育士相互の協力が必要になってくる。

「苦手な物でも一口は食べるように促す」と食事の項で「望ましい経験と配慮」でも「保育経過と今後の課題」でもあげられている。零歳児にとって離乳食の摂取は重要な課題である。そのため基本的には担当保育士が食べさせている。しかし、いろいろな都合から担当以外の保育士が食べさせることがある。その時に、どのような物は苦手なのか等その子どもの普段の様子を知っておくことができれば、担任保育士と同様のかかわりをする事ができる。

「今後の課題」はその月のねらいを受けて行ってきた保育を振り返り、翌月の月案を考える基になることを月末に零歳児クラスの担任保育士全員で検討して書かれたものである。この欄でも子どもの名前が書かれて課題があげられている。特に留意して個別に保育していくことが必要なことであり、零歳児クラスの子どものにかかわる機会のある職員に書かれていることを意識してもらうために、個別の指導計画だけではなくこのようにクラス全体月案の「今後の課題」としてあげられたのである。

例えば、苦手な食べ物は口から出したりするので、一口は食べるように促すことを継続させていく。全体的に食べようという意欲の弱い子もいたりするので、その子どもに食べさせる保育士はさらに配慮していかなくてはならない。高月齢の子どもも食事中に寝てしまうことが多いので、本来午前中の睡眠は必要ない月齢の子どもにも食事をしっかりとらせるために寝かせていくわけである。

このように、クラス全体として保育に配慮していかなくてはならないことをあげ、零歳児クラスの保育士全員が承知して意図的に配慮した保育を行う必要性が書かれている。この「今後の課題」を受けて零歳児クラスの保育士は自分の担当の子どもの保育とそれを含めてクラス全体の保育についても意識していくことができるようになると考えられる。

上の項目は、特に零歳児クラス全体の指導計画の必要性がわかりやすい項目としてあげたが、いずれも零歳児クラス担任保育士は全員が承知していかなくてはならないこと、零歳児クラスの子どもの全員について配慮していかなくてはならないことである。12名しかいなくても、また入園した子どもの月齢が前年と同じようでも、家庭における育て方等の違いからその年によって子どもの状態は随分と異なる。そのため、このような指導計画は子どもの実態を踏まえて毎年書かなくてはならないのである。

おわりに

今回は零歳児クラス全体の指導計画を立てる意義を論ずるため、指導計画そのものについての検討が十分にできなかった。今後は、5月の月案全体について考察すると同時に、4月の姿をどのように受けたか、6月はこの後どのように継続されたか、を検討していく。さらに、クラス全員が1回寝の生活リズムになり零歳児クラスの子どもの一日を通して同じ生活や活動ができるようになった時期の月案を取り上げ、零歳児クラス全体の指導計画を書く意義を論じていきたい。

引用文献

秋葉英則・白石恵理子監修 大阪保育研究所編 1999『0歳児』あゆみ出版.

千羽喜代子・吉村真理子・大場幸夫編 1990「保育講座乳児保育」ミネルヴァ書房.

林陽子 2007「保育所主任保育士がとらえた乳児保育の課題」『岡崎女子短期大学紀要』10: 77-87.

村上博文 2009「乳児保育室の空間変成と“子ども及び保育者”の変化」『東京大学大学院教育学研究科紀要』49: 21-32.